

「あさい農園」の挑戦

オフィスに集まつたあさい農園のスタッフ。持続可能な未来型の農業を追求する

明治40年の創業から百余年にわたり、緑化樹の生産販売に取り組んできた浅井農園。5代目が第2創業として生産を開始したミニトマトのように、植物の可能性を探求し、新たな価値を創造する事業を展開している。

農業を変えるために必要なことを見極めて

「未来の子どもたちの職業選択の中、農業があがってくるのが理想です。日本の農業を変えていく」と確固たる信念を持つ話す株式会社浅井農園の代表取締役・浅井雄一郎さん。スタッフの平均年齢は20代後半と活気にあふれ、明るい事務所を見ていれば、その未来は遠くないと予感させる。単なる農作業者ではない、アグロノミスト(=農学士)集団をスローガンに、研究開発型の農

業カンパニーとして、次々と事業を開発する。新たな農業ビジネスに挑戦し続けるには、「人財」が不可欠。「社屋やハウスを建てましたが、それらは箱で、箱の出来栄えは社員次第。一人ひとりの働きにワクワクする箱にも、そうでない箱にもなります。素晴らしい箱にしていくために、掃除し、メンテナンスするのが経営者の役割です」。同じ志をもつ仲間と研究開発を進め、能力を結集する。またベルギーや中国出身者などの雇用やアフリカ各国からの研修生を受け入れるなど、世界中の人材や情報収集にも取り組んでいる。



あさい農園オリジナルのミニトマト。甘美とジューシーさが味わえる「はぐくみトマト」は「ココロ・カラダ・マイを育む」がコンセプト。小粒ながら甘味や旨味が濃厚で食べ応えのある、高リコピンのミニトマト「たっぷりコ」

トマト嫌いの子どもたちが好きになるトマトを育てる

浅井農園として5代目となる雄一郎さん。経営理念はアメリカヘインターンシップに出た19歳の夏が原点だという。「ビジネスとしての巨大農業の現場を目の当たりにし、憧れと危機感を抱きました。祖父や父の跡を継ぎたいと考えていましたが、家族経営の農業に対するイメージは

植木から急にトマトでしたから父はびびったでしょうね、それでも好きにさせてくれたんですね」と当時を振り返り笑顔で話す。

「いまの農業の課題は、70歳を超えて現役の方が多く、息子が50歳で跡を継いでいるから借金してチャレンジできるところに限界がある。その点、父は60歳で『あとは任せた』と、私と弟に事業を託し、経営に一切口を出さなくなりました。父の賢明な判断のおかげで今の私たちがあります」と続ける雄一郎さん。29歳で代表取締役に就任して農業法人経営の傍ら、三



101年目を迎える平成19(2007)年、第2創業としてミニトマト事業に参入。「はじめから、ミニトマトの栽培を決めていたわけじゃないんです。コンサルタント時代に出会ったミニトマトがふと頭に浮かんで。実は私自身はトマトがあまり得意ではなかつたのですが、その時の味は忘れられないおいしさで。トマトは子どもが好きな野菜ランクで2つ星ですが、嫌いな野菜でも2位と好き嫌いが分かれる野菜です。それなら栽培技術によっておいしいミニトマトを作ろうと、苗木用のハウスで栽培を試みました。柱を赤に塗つて

浅井農園は明治40(1907)年より続く老舗で、創業以来サツキ、ツツジなどの樹木の生産販売を行っていた。津から鈴鹿一帯は日本でも有数の産地であったが、需要供給のバランスが崩れる中で、同じことをやつていては存続が厳しいと直感し、

それほどよくなかった。自分に見ている世界は狭い、そこから世界の農業を見たいとバックパッカーで旅に出ました。農業での挑戦に向けて思いが高まり、大学卒業後は経営コンサルティング会社を経て、環境ベンチャーの会社に勤めたのちUターンする。

浅井農園は、2007年、第2創業としてミニトマト事業に参入。「はじめてから、ミニトマトの栽培を決めていたわけじゃないんです。コンサルタント時代に出会ったミニトマトがふと頭に浮かんで。実は私自身はトマトがあまり得意ではなかつたのですが、その時の味は忘れられないおいしさで。トマトは子どもが好きな野菜ランクで2つ星ですが、嫌いな野菜でも2位と好き嫌いが分かれる野菜です。それなら栽培技術によっておいしいミニトマトを作ろうと、苗木用のハウスで栽培を試みました。柱を赤に塗つて

植木から急にトマトでしたから父はびびったでしょうね、それでも好きにさせてくれたんですね」と当時を振り返り笑顔で話す。

「いまの農業の課題は、70歳を超えて現役の方が多く、息子が50歳で跡を継いでいるから借金してチャレンジできるところに限界がある。その点、父は60歳で『あとは任せた』と、私と弟に事業を託し、経営に一切口を出さなくなりました。父の賢明な判断のおかげで今の私たちがあります」と続ける雄一郎さん。29歳で代表取締役に就任して農業法人経営の傍ら、三



栽培管理技術の統合によりオーダーメイド型の生産

浅井農園の強みは、自社が開発するオリジナル品種だ。浅井社長がバッパッカー時代に培った現場を自分で確かめるのと同様に、世界中の品種を目利きする。南米やオランダ、スペイン、イスラエル等の新しい有能な品種を評価し、日本人が好む味や色を引き出すための栽培技術を定め、特徴ある新たなトマト品種を発掘する。毎年30~50品種以上を試験するが、店頭に並ぶのはそこから2~3年に一つ程度と、流通までを見極めて吟味する。

現在、最先端のスマート農業技術の一つとして「光合成の見える化」を研究中。光合収量を数値化し、ハウス内の湿度・温度・二酸化炭素量などを調整し、品種ごとの栽培環境を最適化させているという。また農業が左右される季節や天候による日射量の差を、LEDで補完するという研究も実用化。LED光を照射することでも光合収量を最大化させ、年

間を通して生産量を一定化させ、まさに科学する農業を具現化している。生産規模拡大に取り組み、グループ会社として、工場の排熱・余剰蒸気を再利用する「うれし野アグリ」、地集約化を図りキウイ産地化を計画するなど、農商工連携により次世代型農業のモデル構築にも挑戦している。

「津市だけにこだわるわけではなく適地適作です。考えなきゃいけないのは地域資源をいかに活用するかで、間伐材もエネルギーとしての地域資源の一つ。耕作放棄地が多くなっている中で農地もそうです。荒れ果てたままになっているのはよくない、誰のための、何のためのものかを考えないと」と浅井社長。キウイの8ヘクタールの圃場には県内の畜産・牡蠣養殖業者の協力を得て、3000トンの堆肥と300トンの牡蠣殻石灰を入れ基盤整備を行つたが、これも地域資源の循環。そのこと一つをとっても農業は地域にとって価値のある仕事だ。

「植物と二歩先の未来へ」を理念に掲げ、50年先の子どもや孫の世代を見据えて土を耕し、苗を植え、地



1.2. おいしいトマトやカラフルなトマト、新しい機能性を持つトマトなど、世界中から収集した特徴のあるトマト品種について、あさい農園の研究棟において栽培試験を実施、評価して、実用化に向けた研究開発に取り組む。
3. 赤く育ったミニトマトの収穫をオーテーション化
4. 雄一郎社長の挑戦は、サツキの苗木を育てていたハウスの一角でスタートした。柱のサビを落として赤いペイントを塗って、ミニトマトの圃場にした

「荒れ果てたままになっているのはよくない、誰のための、何のためのものかを考えないと」

現在、最先端のスマート農業技術の一つとして「光合成の見える化」を研究中。光合収量を数値化し、ハウス内の湿度・温度・二酸化炭素量などを調整し、品種ごとの栽培環境を最適化させているという。また農業が左右される季節や天候による日射量の差を、LEDで補完するとい

うことでも光合収量を最大化させ、年間農業の発展を目指している。